

# 大原社会問題研究所資料の研究(2)

森 田 俊 雄

## はじめに

本年、2015年度は城南学園創立80周年である。遡れば1935年3月、坂上綱吉によって城南女子短期大学の前身である城南女子商業専修学校が創立され、大阪に女子教育の新たな門が開かれた。1935年当時、大原社会問題研究所(以下、大原社研)は大阪市天王寺区伶人町で活動が続いていた。1936年で事実上活動を停止するのであるから研究所の最晩期である。この時期、研究所の存廃問題を抱えながらも依然として旺盛な活動を続けていたが、それも1935年までであり、年表<sup>1)</sup>を見れば1936年には研究機関としての活動はほぼ終息し、1937年に大阪での活動に終止符を打って大原社研は東京に移転した。大阪の大原文庫は戦火を免れ、戦後、大阪府立図書館に移管されて再整理されると共に冊子目録が作成された。後に遡及入力されWebOPACにより書誌検索が可能となり、今日に至る。

大原社研資料の大阪府立図書館移管から今日まで、図書館員による大原文庫の資料紹介はあっても、図書館員による調査・研究については紹介されることがなかった。今回は図書館員による大原文庫の調査・研究活動を紹介し、次に文庫とアーカイブズ、最後に法政大学大原社会問題研究所(以下、法政大原)で大原社研資料の整理作業に従事した是枝洋の証言を紹介する。なお名前の敬称は省略した。

## 第6章 大原文庫と図書館員

### 6-1. 図書館員による大原文庫の研究

大原社研資料は既に紹介したとおり1937年に大阪と東京に分割された。大阪府に譲渡された資料は、戦後大阪府立夕陽丘図書館(以下、夕陽丘図書館)から、一部が1950年建学の大阪社会事業短期大学(以下、社事短)に譲渡され、1982年社事短廃校に際し大阪府立大学社会福祉学部に移管されている。

これについて大阪府立大学の庄谷怜子(1933-)が、大阪府立大学附属図書館報『図書館だより』(12号)に寄せた長尾文庫紹介の文中に、次のような件があるので紹介しておきたい<sup>2)</sup>。なお文中の「法政大学大原社会問題研究所の資料」とあるのは、正しくは「大原社会問題研究所の資料」である。

「なお戦前の社会事業資料は厚生行政関係資料として存在している場合が多く、創設当時の研究

スタッフは各都市自治体の関係部局をまわられて、古い公文書類から社会事業史や厚生事業関係資料を熱心に発掘、収集されたということです。著名な大阪市社会部資料の一部がそのようにして収録されています。また、法政大学大原社会問題研究所の資料は大阪では府立夕陽丘図書館に収録されていますが、おそらくその周辺ないし重複部分が短大図書館に若干量保存されているのも、こうした資料収集活動の一端にかかわることかもしれません。これについては大原社研の主力資料とも関連づけてはやく整理しなければならないのですが、なお未整理の部分が少なくありません。」「(「社会福祉学部の発足について」)

また先に紹介した夕陽丘図書館から社事短に譲渡された資料の一部が、大阪府立大学から夕陽丘図書館に寄贈という形で戻されたが、その資料の中に社事短が収集した資料、及び社事短で生産された資料と共に大原社研の資料が混在していた<sup>3)</sup>。それらの資料は整理されたが、少数数であるがパンフレット類や端本などが未整理のまま保存されているのである。このような複雑な経過を大阪に譲渡された大原社研資料は辿ってきたのである。

大阪府立図書館天王寺分館(以下、天王寺分館)は、大原社研資料の蔵書を核として、社会科学関係資料を収集・保存・提供する図書館としてスタートし、その後身である夕陽丘図書館は当然天王寺分館の資料収集方針を継承して活動した。しかし夕陽丘図書館が大原社研資料を継承して活動していることを知る利用者は皆無に近かったであろう。何故なら利用者は日常的に自分の興味の範囲で利用する図書館の資料を知るのであり、その範囲を超えて多方面に資料を探索することは滅多にしないものである。そこで図書館は様々な資料を展示という形で利用者へ広報し、図書館所蔵資料への関心を喚起することを行うのである。夕陽丘図書館の場合にはその一環として大原文庫を紹介した。図書館員による大阪府教育委員会月報への大原文庫紹介記事<sup>4)</sup>、大阪府立図書館紀要等への論文投稿<sup>5)</sup>、そして展示<sup>6)</sup>。図書館員は展示のための作業をすることで大原文庫資料の所在を知り、その歴史的経緯を知ることにもなる。夕陽丘図書館における大原文庫の存在は、やがて大原社研の人物調査や大原文庫の研究に情熱を傾けた図書館員石井敬三(1950?-2007)を生み出すこととなった<sup>7)</sup>。

## 6-2. 石井敬三の研究活動

石井がどのように大原文庫にアプローチしたのか簡単に紹介しよう。以下が石井の論文である。

(1)1988年：大原文庫蔵「ベデカ」と高野岩三郎(大阪府立図書館紀要24号)、(2)1989年：大阪府立夕陽丘図書館蔵大林宗嗣旧蔵書目録・洋書の部(大阪府立図書館紀要25号)、(3)1990年：大阪府立夕陽丘図書館蔵大林宗嗣旧蔵書目録・和書の部(大阪府立図書館紀要26号)、(4)1991年：〈研究ノート〉大林宗嗣旧蔵書・書き込みの概要(大阪府立図書館紀要27号)、(5)1995年：大原社会問題研究所図書室の図書整理作業—創設期から東京移転まで—(『転換期における図書館の課題と歴史—石井敦先生古希記念論集—』)(6)1996年：大阪府立図書館大原文庫蔵「現行法規大全」と

森戸事件(『図書館文化史研究』13号)<sup>8)</sup>

他に石井の個人誌「大原文庫研究の栞」<sup>9)</sup>や、大阪府立大学附属図書館報「図書館だより」(1992年 第29号)に櫛田民蔵と久留間鮫造の活躍を描いた「欧州図書収集物語」がある<sup>10)</sup>。

石井論文の概略を以下に記す。(1)(2)(3)は大原社研の研究員であり後に同志社大学の教授となった大林宗嗣の遺族から図書の寄贈を受けたが、蔵書は大林文庫の扱いを受けず一般図書として受入られたため、一般に知られることもなく紹介もされないことを危惧した石井が、蔵書を著者、タイトル、版次、出版社、出版年の書誌事項にまとめリスト化したものである。(4)大林旧蔵書の本人、及び妻の書き込みを紹介し、その意義を明らかにしようとしたもの。(5)図書の標題紙上に残る分類記号などを手がかりに、大原社研の図書整理の実際を明らかにしようとしたもの。

(6)森戸事件に遭遇し、森戸辰男、大内兵衛の擁護のために奔走する中で裁判に備え「現行法規大全」を購入した高野岩三郎。職を辞して抗議する若き研究者の明日を思い、彼等を思量る姿と、事件の渦中で揺れ動く高野の心の軌跡を描いている。

### 6-3. 石井敬三の活動を継承すること

石井が追及した問題は筆者もまたその一部を共有するものである。石井が編集発行したB4版二つ折り、両面印刷、無綴じの『大原文庫研究の栞』は、大原文庫、大原社研に関心を寄せる図書館員が、各自の関心領域を長ければ1万字程度の文章にまとめ、それに石井が簡単な著者紹介を付し、石井自身の時々の思いや発見、例えばシアトルの大林宗嗣(No.1)や萩野秀一(大原社研の図書館司書、天王寺分館の司書)の履歴(No.3)を発掘して紹介している。

今思えば石井が『大原文庫研究の栞』を発行した意図は、大原社研、大原文庫に関心をもちつた者たちの緩やかな絆を作り、それへの関心を持続させながら、その先には大原文庫、大原社研研究会のような場を思い描いていたのではなかったかと想像する。そしてその緩やかな絆の場に、小さな発見や研究のアイデアを持ち寄ることで、石井自身の大原社研、大原文庫研究の小さな礎とし、また関心をもちつた者たちとの気の置けないラフな相互交流による、魂の触発を考えていたのかもしれない。

石井が発行した「大原文庫研究の栞」に寄稿した者は、石井の活動に関心を寄せている友人たちである。「大原文庫研究の栞」は国会図書館には寄贈されているが、見出し等は検索できないので5号までの発行年月日、ページ数、見出しをあげておこう。



筆者蔵

No.1 1989. 4. 23. 4 p

創刊にあたって. 大林宗嗣の周辺. 高野岩三郎の周辺. ベデカのこと. ベファー文庫.  
シアトルを想う. (石井敬三)

No.2 1989. 10. 3. 10 p

権田保之助と住宅問題. 森田俊雄. 著者森田俊雄氏紹介. 関一(せきはじめ)のこと. (石井敬三)

No.3 1990. 4. 23. 12 p

大原文庫の明治啓蒙書. 平野翠. 著者平野翠氏紹介. 情報公開コーナー. 追悼仲田憲弘氏.  
萩野秀一氏のこと. 資料漫歩(その1). 編集後記. (石井敬三)

No.4 1991. 3. 1. 10 p

大原文庫の追加資料発見. 中寫真. 著者中寫真氏紹介. 訂正とお詫び. 資料漫歩(その2).  
大原社研の建物について考える. 編集後記. (石井敬三)

No.5 1991. 8. 15. 10p

東京経済雑誌をめぐる雑誌群一広告掲載誌紙に見る出版状況とその特色一. 金沢幾子.  
著者金沢幾子氏紹介. 資料漫歩(その3). 編集後記. (石井敬三)

以上のような記事が寄稿された訳であるが、石井の突然の死によって『大原文庫研究の栞』は中断された。まだほんの助走にすぎなかったこの個人誌の評価に、早急な断を下すことは避けたい。ここで重要なことは、図書館員他の知友に対して大原文庫への関心を喚起し、それがわずか5号であったとしても継続させたことであり、そのための媒体としての役割を創出したことにある。

多くの大学、公共図書館に「文庫」が存在する。その多くが大原文庫のような組織の文庫ではなく、個人の寄贈による「個人文庫」である。図書館に個人から資料の寄贈があり、資料を整理し文庫が形成されれば、どの図書館も少なくとも簡単な蔵書内容の紹介はするであろう。しかし継続して文庫の資料や寄贈者の紹介を続けることはしていない。いや文庫を所蔵する図書館のインターネット・ホームページを見れば、常時一定の情報は提供されている。確かにそうであるが、紹介を続けるとは図書館が文庫周知のための調査研究や更新情報の提供を行っていることである。月日が経過し文庫の存在は次第に図書館員も含めた利用者、市民の記憶から薄れていくこととなる。それをどうしたら食い止めることができるのかを考えるのは図書館員の責務である。

## 第7章 文庫とアーカイブズ

### 7-1. 「特別コレクションだより」のこと

神奈川県藤沢市の藤沢市図書館の地域館の1つ、湘南大庭市民図書館に歴史学者羽仁五郎(1901-1983)が収集した資料を保存・公開する「羽仁文庫」(1986年開設)がある。1985年藤沢中央図書館は所蔵する「文庫」紹介のために『特別コレクションだより』を市民に向けて発行した。第1号は

1985年9月に発行され、1994年3月発行の第10号で完結した。足掛け10年にわたって発行されたわけであるが、この10年間に『特別コレクションだより』で紹介された個人文庫は、発行当時既にあった政治家片山哲(1887-1978)の「片山文庫」(1976年開設)、歌人川田順(1882-1966)の「川田文庫」(1970年開設)、藤沢市の姉妹都市米国マイアミビーチ市寄贈の「マイアミ・ビーチ文庫」(1959年開設)に加え、「羽仁文庫」、江口朴郎(1911-1989)の「江口文庫」が新たに加わったわけである。『特別コレクションだより』に掲載はないが、2000年に一般公開された哲学者古在由重(1901-1990)の「古在文庫」が加わることとなる。

ここで筆者が評価するのは、1年に1回であれ10年に渡り文庫の存在を周知し続けたことである。1985年当時はインターネット以前の時代である。広報の主役は紙媒体であった。この『特別コレクションだより』には、寄贈者の紹介や寄贈者に関係の深い人々の寄稿文と共に、寄贈資料を整理している図書館員の声も収録されている。「羽仁五郎文庫の新設にむけて」(第1号)では寄贈の経緯が紹介され、「羽仁資料整理業務日誌から」(1~3号)では資料整理の過程、資料と格闘する図書館員のつばやき、また膨大な資料の仕分けをした山領健二(1933-)の手記(2号)があり、資料の一つ一つを手にとった者の感触を読み取ることができる。また『特別コレクションだより』第3号(1986年10月)が「羽仁五郎文庫開設記念特集」である。この号にも前記の業務日誌や編集後記に図書館員の言葉が綴られている。

いわばこういった文庫が整理されていく途上において、整理に携わる図書館員や寄贈者の人物紹介などの周辺情報が豊富であるのとないのとは、文庫への親近感がまるで違って見えるものである。市民の図書館として、個人文庫が整理できました公開していますだけでは余りに情報不足である。図書館は積極的に文庫の周辺情報を発信して欲しいものである。例えば東京大学の大学院法学政治学研究所附属近代日本法制史料センター、通称明治新聞雑誌文庫の資料は、晩年の宮武外骨(1867-1955)が事務主任として資料の蒐集に努めたという情報だけで文庫の存在が違って見える<sup>11)</sup>。

## 7-2. 文庫のアーカイブズ

文庫が形成される発端から完成、そして展示までをアーカイブズ=記録として残すことは、後に文庫の成立過程を知るためには欠かすことができない。この一連の動きの記録を「文庫のアーカイブズ」と呼んでみたい。「羽仁文庫」の場合は資料整理の完結を待って、文庫を市民に広報するために関係者を招待しての「展示会」が開催され、その報告書として『羽仁五郎文庫開設記念展記録』



筆者蔵



(1987年刊)が発行された。

元大阪府立図書館員高松敏男が「藤澤桓夫蔵書始末」(『CABIN』第5号)を書いている。大阪の作家藤澤桓夫が1989年に死去。その葬儀に参列したことから筆を起こし、その年の秋の読書週間で藤沢の展示を企画して大きな反響があり、それを契機に図書館が蔵書の寄贈を申し入れ、典子未亡人から3つの条件付きで寄贈の意思表示があり、図書館はそれを受諾し「藤沢文庫」が形成され目録も発行された<sup>12)</sup>。この記事は実際に受入れを計画した者でなければ知り得ない事実があり、「藤沢文庫のアーカイブズ」として保存され参照できる状態にしておかねばならないだろう。

実際、資料整理に関わらず図書館員の生の声はどこに残っているのか。日本図書館協会の全国図書館大会や各県の図書館協会主催の図書館大会の議事録には記録されている。論文中心の図書館関係の雑誌であれば掲載されることはない。いわんや図書館員の整理業務についての感想、悩み、失敗などは全く記録されることはない。筆者は公共図書館で文庫の整理に関係したが、その際の整理内容、役割分担、経過などについて一切記事に残してこなかった。特別な文庫の整理であれ、記録を残すという習慣が図書館にはなかったし、またそれが必要であるとの認識も筆者には当時なかったのである。また整理業務ではないが、個人文庫目録に法政大原の所員若杉隆志が「文庫の受け入れの経過や解説、旧蔵者の人なりなどが冊子目録にもりこまれることが望ましい。文庫を理解する大きなたがかりとなるからである。」<sup>13)</sup>と指摘したことを、目録作成時に想起することもなかったのである。この姿勢は筆者が如何に一個の図書館に意識を埋没させていたかを、改めて反省と共に思い出すのである。

例えば整理が途中からであればそれをどのように引き継いだのか、新規であれば当初の計画、その後の変更、何が整理の障害となったのか、それをどう解決したのか等々、様々な問題に直面しそれを解決して整理作業は完了したはずである。従って何らかの方法で、図書館の資料整理の総体と共に、図書館員の言葉を同時に残す必要を感じる。それが図書館の資料整理の集合記憶として保存され、常に取り出し可能な状態に維持され何時でも検証可能、参照可能であることが望まれるのである。

### 7-3. 文庫整理情報を記録し、アーカイブズとして保存する

特別に個人文庫を整理した場合には、その資料整理過程の詳細を記録するとともに、当該文庫が(1)いつ(2)誰によって(3)どのような理由で寄贈されたのかを記録に残すことである。以下記録すべき項目を筆者の案として上げてみたい。

#### 1. 文庫の名称：名称の由来

寄贈者側の情報

#### 2. 所有者情報：所有者の名称：男女別：年齢：所有者本人の寄贈、代理人寄贈者氏名(本人との関係)：寄贈者住所：資料所有者のプロフィール

\*購入の場合には、購入金額

3. 寄贈の経緯：寄贈の動機

受入側の情報

4. 受入経緯：受入理由：決定責任者名

5. 資料の内容：全資料受入か選択受入か：整理された資料の内訳・冊数・点数（和洋図書、和洋雑誌、その他資料）：貴重書に指定した資料

6. 寄贈資料の評価額：評価方法

7. 資料整理の予算措置：特別に予算化：国の補助金

8. 整理に関する情報：整理期間：担当課（課長名、担当者名）：使用した分類法、分類に関する情報（分類法の採用理由：特別な分類法は類表を制作者名と共に添付）：自館整理か委託か：委託先会社名：書誌作成情報（目録カードのみ（作成目録カードの種類）、MARC化（使用したMARC名）：資料装備仕様書：文庫目録作成の有無（目録作成年度：目録作成経費：作成部数：配布先一覧）

9. 整理担当者による整理過程で起きた問題点、感想などを名前入りでまとめる。

10. 当該文庫の取材記録：（映像、新聞、雑誌等をファイル）：図書館員、研究者等による文庫紹介、関係論文（掲載雑誌名等の書誌情報：現物、抜刷）：インターネット・ホームページへの掲載情報のファイル

11. 展示会記録：展示会の期間：作成資料（チラシ：冊子（作成部数：配布先：作成経費）：入場者数：展示担当者名：写真記録：展示会記録の情報発信

12. 関連講演会記録：講演会名：開催年月日日、時間：講師名（所属：プロフィール：謝礼）：演題：配布資料：参加者数：写真、録画、録音記録：講演会記録の情報発信記録

1 から12まで上げた項目は細かすぎることはないと思う。更に追加すべき項目があるかもしれない。今後更に深めてゆきたい。

#### 7-4. 文庫が忘れ去られることへの危惧

文庫の死蔵ということがいわれる。九州大学附属図書館の山根泰志の論文「忘れられた文庫たち—中央図書館所蔵幕末明治期漢学者旧蔵書群—」は「本来はまとまったコレクションでありながら、文庫として別置されずに他の資料と混排されたため、忘れられていた幕末明治期漢学者旧蔵書群の概要を報告し、その存在意義と今後の整理方針を述べる。」というものであるが、その中で“個人文庫が忘れ去られた理由”と“文庫としての存在がわすれられることによって生じる図書館の問題”を上げている<sup>14)</sup>。ここでは都合上前者を（A）、後者を（B）として引用する。

（A）1）分類、排架上で文庫として独立していなかった 2）文庫印が認められるのは近藤文庫と逍遥文庫のみであり、それもカードと資料両方には捺されなかった 3）文庫目録や受入経緯の記録等が作られなかったか或いは残っていなかった 4）受入が帝国大学時代のため、事情を知る

教職員がいなくなって久しい 5) 研究・影印等で利用されても資料の由来が言及されることはなかった 6) 旧蔵者の知名度が低く、彼らを対象とした研究が少なかった 7) 資料の来歴についての調査が散発的で網羅的にされることがなかった

(B) 1) 資料の来歴という、書誌学的に極めて基本的な情報を利用者に提供できない 2) 多くの資料の中に埋もれるため、研究に利用されずに死蔵される 3) 旧蔵者の名前も表に出ていないため、彼らについて研究する人も気づかない 4) 資料の価値・性格に即した整理・保存・提供ができない 5) 文庫に付随して寄贈された未受入資料の由来がわからなくなる 6) 自館の蔵書に対する認識を誤ってしまう 7) 自館の歴史に対する認識を誤ってしまう 8) 文庫の受入に尽くした人々の意思を踏みにじる 9) 図書館に対する社会的評価・信頼を失う

大変貴重な指摘である。では(A)の項目の幾つかを大原文庫に該当させて述べてみたい。まず(A)の1)分類、排架上で独立は、前稿で述べたとおり図書の分類はNDC第6版である<sup>15)</sup>。これは和書、洋書とも同じであった。排架上の独立は、洋書は別置されている、つまり独立して排架されている。しかし和図書は天王寺分館の図書と混排されている。またWebOPACの書誌でも大原文庫の記名はない。結局現在は和洋図書とも大原文庫の冊子目録を参照するしか方法がないのである。和図書を例として説明したい。

天王寺分館は大原文庫と同じNDC第6版を使用して分類をし、大原文庫と同様の整理方法で分類記号、著者記号を付したため、請求記号だけでは大原文庫と天王寺分館の図書を区別することはできない。以下例として「聖書」という標目の図書5点を、請求記号順に並べてみる。

- 193/S1/1 旧新約聖書 日本聖書協会 昭和28年(天王寺分館) 1冊目の聖書
- 193/S1/2 旧新約聖書 日本聖書協会 昭和23年(大原文庫) 2冊目の聖書、但しこの図書は出版年が1948年のため大原文庫の図書ではない。紛れ込んだ似非大原文庫本。
- 193/S1/3 新約聖書 改訳 日本聖書協会 昭和26年(天王寺分館) 3冊目の聖書
- 193/S1/4 新約<sup>ママ</sup>全書 上海 美華書館 明治8年(大原文庫) 4冊目の聖書
- 193/S1/5 新約聖書 警醒社 大正10年(大原文庫) 5冊目の聖書

天王寺分館の図書は『大阪府立図書館天王寺分館蔵書目録』(1969年刊)、大原文庫の図書は『大阪府立図書館天王寺分館蔵大原文庫和漢書分類目録』(1969年刊)から抽出したものである。

5点の聖書を見れば分かるように、大原文庫と天王寺分館の図書は複雑に混排されている。これは大原文庫と天王寺分館の図書を同時進行で分類整理した結果であろうと推察するが、詳細は一切不明である。いずれにしても書架上で大原文庫を見分けることはできない。

他の例を上げてみたい。1911年出版の「岡島誘」訳の「宗教心理講話」(Pratt, James Bisset 著)である。大阪府立図書館のWebOPACで「岡島誘」を検索すると4件ヒットする中に当該図書がある。当該図書名をクリックすると上段に2件ローカルデータがある。所蔵館は2件とも中央図書館であるが、上段の請求記号は「111.2/1/#」(大阪立図書館和漢図書分類表による分類)、下段は「161



／P1／1」である。上段が1904年開館の中之島図書館（旧大阪図書館、旧大阪府立図書館）から移管された図書、下段が大原文庫の図書であるが、ローカルデータから判別することは事実上不可能である。このように大原文庫を始め図書館が所蔵する他の文庫も含め、文庫資料への絞り込み検索ができないことで、文庫の存在が気づかれなままになることを恐れるのである。

図書館員は文庫が書庫内で別置され、文庫名が掲げられている、あるいはラベルに文庫名が貼付されていることでそれと認識するが、山根が指摘するように排架上独立していなければ認識することは不可能である。また利用者は検索手段としてWebOPACがあっても文庫の記名や、請求記号の意味内容の案内がなければそれと認識できない。また文庫のカード目録や冊子目録が作製されていなければ、全く文庫にゆき着くことはできない。

(A) の3) 文庫目録や受入の経緯の記録について、目録は1958年に『A Classified Catalogue of the Collection of Old Books in The Tennoji Branch of The Osaka Prefectural Library』の“Part 1”が刊行された。この目録はタイトルに天王寺分館とあるが、1800年以前印刷・出版の大原文庫の洋書目録であり、1961年には1801年～1810年印刷・出版の同名の洋書目録、またその補遺版が1962年に刊行された。1967・68年に『大原文庫洋書分類目録』が全4冊、1969年に図書、逐次刊行物を収録した『大原文庫和漢書分類目録』全1冊が刊行された。「受入の経緯」は、大阪府厚生会館（旧大阪府社会事業会館）から大阪府立図書館に移管された経緯について1945年に大阪府援護厚生課が作成した文書がある<sup>16)</sup>。大阪府立図書館側の受入の経緯については、「府立図書館へ移管後の大原文庫図書整理の経過」が筆者の知る唯一の資料である<sup>17)</sup>。

(A) の4) 事情を知る職員は確実に減少している。

(A) の7) 資料の来歴についての調査は、まだ不十分である。

大原文庫の場合には、文庫としての存在が忘れ去られているわけではないと思うが、かといって大原文庫の資料研究や資料を使った論文が生産されているかといえばそうでもないのである。となれば今や大原文庫は忘れ去られようとしているのではないか。それを危惧するものである。

## 7-5. 文庫を忘却から救う工夫とは

文庫が忘れ去られてしまわないようにするためには何をすればよいのか。必要なことは「文庫のアーカイブズ」を構築することである。大原文庫でも、「7-3 文庫整理情報を記録し、アーカイブズとして保存する」で述べた項目を拾い上げ図書館として整理し、まず図書館員に周知することから始めることである。そうでなければ文庫の展示や資料紹介、資料の価値判断できないはずである。

「文庫のアーカイブズ」を築き、文庫の基本情報の把握に努める一方で、市民に文庫を身近に感じてもらう工夫をすることも必要であろう。無論文庫といってもその蔵書内容は、古典籍、漢籍、洋書から近現代資料まで様々であり、研究者以外には手を出さない資料も沢山ある。それを承知の上で、展示以外の方法の一つ提案してみたい。それは文庫の学習会や研究会、勉強会ができないだろうかということである。〈文庫資料・媒介者（利用者・市民・図書館員）・利用者・市民〉とい

う関係性において、媒介者は文庫に何んらかの興味を持つ主体であり、各自が寄贈者の人物研究、著作読解、資料紹介など何でも興味の赴くままに文庫を渉猟し、媒介者が会話し、知識を披瀝し、手記を残すと同時にそれを発信する。古文書を読む会、手紙や日記を読む会といったような会と同じような「文庫の会」を作り、知ること、発見することの喜びを大事にしながら、継続して文庫と関わることができることを眼目としたい。また石井の『大原文庫研究の栞』のような紙媒体を不定期にでも作り、発表と記録の場として蓄積してもよいだろう。

以下筆者として材料を2つ提出したい。1つは、蔵書印、2つめは図書と雑誌からの考察である。

(1) J. -B. Boichot 著 *La révolution dans l'armée.* という本の標題紙に、直径 4 cm の円形の蔵書印がある。外周には、SECTION DU PANTHEON 17 Rue des Boulangers PARIS、円内には、BIBLIOTHEQUE des Sciences Sociales の文字がある。また出版地の PARIS の下に、BIBLIOTHEQUE -Fondation LANSAC の印が押してある。この本の旧蔵者である BIBLIOTHEQUE des Sciences Sociales とはどのような組織なのか、また Fondation LANSAC とは何か。こういったことの調査から、著者である Boichot, J. -B. の人物調査、また同じ本を所蔵する日本の図書館があるのかなどを調査する。

(2) 佐藤正男著『もぐらと光(童話集)』という本がある。この本は『月刊大原社会問題研究所雑誌』1935年3月発行、第2巻第2号の巻末「文献 新着図書資料(昭和9年12月)」に寄贈本として掲載されている。出版者は「冬の土社」、出版年は1933年9月、大きさは23cm、177頁、頒価50銭と記載されている。ただしこの本は大原文庫、法政大原にも所蔵されていない。恐らく1937年に東京に移された後、空襲で焼失したものと推測される。CiNii Booksで検索すると、出版者「冬の土社」は、雑誌『冬の土』を発行している。またWorldCat検索で出版地は福島県、松山村であると分かる。幸いにも大阪府立中央図書館国際児童文学館にこの本が所蔵されている。この本の内容や著者佐藤正男の調査、「冬の土社」、雑誌『冬の土』も調査し、何故この本が大原社研に寄贈されたのか、本が出版された時代背景と合わせて考察するなど、様々なテーマが考えられる。

さてこのような会のチューターを図書館員だけに押し付けるつもりない。図書館利用者、あるいは文庫を知る研究者や高校、大学の教員といった人たち、いわば有志との連携ができないだろうか。あるいは図書館OBへの働きかけも必要ではないだろうか。

先の石井の「大原文庫研究の栞」は限られた図書館関係者を接続させる媒体であったが、その流儀を生かして大原文庫の公式の広報紙を作り、外部の人々に文庫の情報を伝える役割と共に、メンバーの思い思いの感想や調査・研究成果の発表紙とし、形は紙媒体でも電子媒体でも作りやすいものになればよいのではないだろうか。

## 7-6. 大原社研資料庫整理の記憶

大原社研資料整理については担当者の声は大阪では喜田春男の小さな声のほかには何も残っていない。先に紹介した『大原文庫研究の栞』の「創刊に当たって」で、石井敬三は次のような言葉を残している。

「大原文庫に対する私の思い入れがだんだん強くなるのに平行して、作業を急がねばならないことが判ってきました。時間の経過とともに、材料が失われてゆくのを、目の当たりにしたような気がしたからです。大原社研当時の関係者の多くが鬼籍に入られているのはむしろ当然のことですが、府立図書館の関係者で整理に携わった方々も退職される方が増えて来ています。日本の社会科学の学説史と図書館史の上で、大原文庫の占める地位が決して小さくないことを考える時、記録しておきたいことが沢山あります。」<sup>18)</sup>

正に石井の言葉の通りである。調査、研究、記録は遅々として進んでいないが、一步でも前に進めていきたい。さて大阪府に譲渡された大原社研の資料整理については、資料整理の担当者の一人であった貴田春男の言葉と天王寺分館の取り組みについて既に述べたが<sup>19)</sup>、今回は法政大原で資料整理を担当した是枝洋の言葉を紹介したい。なおこのインタビューは2013年に筆者が予め用意した質問に是枝が回答したものである。また同じ年、筆者が法政大原では是枝に直接面会して聞き取りをしたものも付記している。

## 第8章 図書館員の証言

### 8-1. 是枝洋と大原社研資料の整理

是枝への質問は2013年に筆者が予め質問を用意し、それに回答をお願いしたものである。また回答の中で注記が必要と判断した事項や、2013年6月に筆者が是枝に面会して質問し回答を得たもので必要な事項は、<インタビュー>として補遺の形で記した。なお回答に登場する大原社研に属した人物の解説は省き、法政大原発行の『大原社会問題研究所雑誌』494・495号、2000年1・2月合併号に掲載の「旧職員・嘱託等の年譜・著作目録リスト」から<著者注>として生没年を記したが必要事項は補記した。なお494・495号は大原社研80周年記念号でウェブサイト (<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/oz/494-495/index.html>) から閲覧ができる。

是枝：できるだけご質問にそってお答えしたいと思います。はじめに簡単に自己紹介しておきます。

私は1930年大阪茨木の生まれで、池田中学（現池田高校）を中退、その後、いったん大阪府庁に勤務していましたが、図書館員を志して、図書館職員養成所にはいり、1956年卒業しました。当時は地方財政危機の時代で、公立図書館は新規採用が少なく、近畿地域の図書館をまわって就職運動をしたのですが、結局入れませんでした。天王寺の図書館にいて、南論造館長にお会いしたとき、府に譲られた大原の蔵書を見せていただいたこともあります。そ

の後、偶然の積み重なりで、大原社研に職をえまして、1992年まで図書係として働きました。私が大原にはいったのは1962年9月です。当時は大原は独立の財団法人で、法政大学大学院5階の一室に事務所をもっていました。

1) 大原社会問題研究所の資料の再整理について

戦前図書の整理は、最初に創立50周年記念事業としての冊子目録作りがあり、実際に閲覧に供せる段階にいたってカード目録作りの2段階だったと思います。第1次整理と、第2次整理というように考えてください。ちなみに80年代になってパソコンが実用化されてから、データベース化のための整理をしました。3回整理したことになります。

<筆者注>

「戦前図書」とは法政大学大原社会問題研究所が所蔵する1945年8月15日までに刊行された単行書を指す。

Q-1: 全体の資料数、資料の種別は、整理前にどこまで判明していましたか。

是枝: 下記のような理由で、おおざっぱなことしかわかっていませんでした。

Q-2: 資料はどこに、どのような状態で、保管されていましたか。

是枝: 戦前、大原社研のあった柏木の土蔵に保管されていました。1945年5月の空襲の際に、大内先生ら研究員ができる限りの資料をここに運び込まれたそうです。土蔵の外にあった図書資料はすべて焼けてしまいました。土蔵そのものも、その後老朽化し、台風の被害を受けて壁がくずれたところも出てきましたが、当時はかなりよく保存されていたと思います。これを運び出して広げられるところがありませんでした。ですから整理は少しずつもってきては、また、戻すという方法で進められたのです。

<筆者注>

大内先生→ 大内兵衛 (1888-1980)

<インタビュー>

森田: 柏木にあった土蔵の写真が法政大原に残っている。写真を見た感想は、かなり大きな土蔵で中は2層になっている。中は資料を入れた木箱などが乱雑に詰め込まれている印象だった。

是枝: 蔵の中は大雑把には洋新聞、洋雑誌のグループや本があった。空襲で焼けるというのでどンドン放り込んだということだろう。

森田: 柏木の土蔵にあった資料は全て保存ということですね。

是枝: そうです。

森田: 柏木の土蔵から運びだした先は法政大学大学院でしたか。

是枝: そこで目録をとった。

森田: それを取りには車で行くのですか。

是枝：乗用車です。当時の所長の久留間先生、大学院生で朝鮮人の金という人、金さんと呼んでいた。その人が運転手をしていた。久留間先生用の車があった。それを使ってそこに本を入れて何回か往復した。

<筆者注>

久留間先生→久留間鮫造(1893-1982)。金さん→金鳳記(『大原社会問題研究所五十年史』(復刻版)のp.165に「運転手をしてきた金鳳記囑託は、今後、資料集収に協力することになった。」とある。)

Q-3：資料整理時の法政大原社研の所長・責任者は誰でしたか。

是枝：所蔵目録は50周年記念事業のひとつとして企画されました。1966年、久留間鮫造所長が退任され、宇佐美誠次郎先生が所長に就任されました。これは研究所の画期をなす出来事でした。宇佐美所長のもとで展示会や目録出版の事業が企画されました。所長が2年で回り持ちするという制度だったので、実際に50周年になったときには所長は大島清先生にかわっていましたが、準備は宇佐美所長時代から進行していました。

<筆者注>

宇佐美誠次郎(1915-1997) 大島清(1913-1983)

Q-4：資料整理時の組織図を示してください。

是枝：組織といっても、小さな研究所ですので、庶務係2名(内1名は資料係兼務)、図書係2名、資料係2名に過ぎません。常務理事3名と専任研究員3名が研究員会議を開いて、方針を決定していたと思います。ここで、ちょっと付け加えますと、大原は戦前から、和書、洋書を扱う図書部と、逐次刊行物、文書、記録を扱う資料部の二本立てになっていました。そして、重要なのはむしろ資料部門だったのです。

Q-5：資料整理時の整理要員の数は、男女別に分かりますか。

是枝：図書係、資料係とも男女各1名です。

Q-6：資料整理に従事した人の経歴は、図書館司書資格を持った人ですか。

是枝：司書資格のあったのは私だけです。

Q-7：資料整理のために特別に雇用された人がいましたか。

是枝：この辺ははっきり記憶していませんが、アルバイトなどを雇って整理するようになったのは少し後のことだったと思います。

Q-8：再整理の整理方針を決定したのは誰ですか。

是枝：整理方針というのがどのようなことをイメージされているのかわかりませんが、そういうものはなかったと思います。目録をつくるということが当面の目標でした。そして、対象とな



る図書はすべて、土蔵から運び込んで、カードを作成し、またもとに戻すというやりかたでした。カードは簡単なものにしようという方針で、研究員の方もカードをとられていたのですが、私がつくるからにはやはり標準的なものにしたいとページ数、サイズなどもいれたりして、せっかく、研究員の方がつくられたカードに加筆したりしていたので、それならおまえがやれということで、結局私がやることになったような記憶があります。

<インタビュー>

森田：専任研究員が全員でカード目録をとったのですか。

是枝：全員ではありません。中林賢二郎さん、斎藤泰明さんという研究員の二人ではなかったかと思えます。手伝ってくれた。(中林賢二郎(1919-1986)。追悼文集刊行委員会編『追憶 中林賢二郎』(1987。中林倭子発行)がある。)

Q-9：再整理に当たり、分類はNDCなど、どのような分類法を使って分類することを決めたのですか。決定したのは誰か、NDCは何版を使用したのか、NDC以外の分類表、大原社研の分類表をそのまま使うという考えはなかったのですか。

是枝：戦前図書については目録作成時には分類しなかったように思います。カードをとった後、書架に並べるスペースがありませんでした。戦後の図書資料が書架の間にあふれていくくらいです。法政大学の麻布校舎というのが港区にあり、それを借りて資料をおけるようになってから、徐々にスペースも増えて、柏木の土蔵から資料を移せるようになりました。特に、69年、大学紛争が起きて、学生が大学院を占拠するような事態となってから、しばらくは麻布校舎のほうに本拠をおいていたこともあります。閲覧もここでできるようになりました。その段階で古い図書の分類がえもしたのではなかったかと思えます。

分類表は私が原案を作成しました。もちろん分類表をつくれという指示は所長からであったと思います。戦前の大原の分類は簡単すぎることではなかったでしょうか。

公開されている研究所として、分類は一般的なものが望ましい、となると、NDCですが、大原の蔵書構成からみてNDCには不満がありました。いろいろな分類法もみましたが、結局、NDCを基礎に大原用に作り直すという方針で作成しました。LCの分類表など、やはり、日本人にはわかりにくいと思いました。その他の分類も日本人にはなじみのないものなので、実用には問題がありました。職員、研究員、常務理事をふくむ所員全体の会議で、何度か議論を重ねて1966年11月にできあがりました。私がいって1年ちょっとの頃ですから、入所後割に早い段階で分類表作成の話がでたようです。

分類表の概略は80年史にちょっと紹介されています。労働問題を4類として、関連分野の著作を集めたことや(NDCでは経営にはいっている賃金管理や、社会にある社会保障など)、マルクス、エンゲルスの著作を主題ではなく、分類表の上で集中したことなどが特徴です。

労働問題の分類は、大原が編集していた労働年鑑の構成を反映したものとなっています。年鑑では労働者状態、労働運動、労働政策という柱をたてていましたから、分類もそれを反映しています。

その頃はそれほど深刻に考えなかったのですが、一館だけの特殊分類は、維持管理も自前でやらねばなりません。分類表が作成当時の思想状況や、蔵書構成、収集方針を反映していたので、時代の変化とともに、改訂が必要となります。私はやめる前からこの分類表の改訂が必要であると考えていましたが、結局大改訂はできないままに退職しました。

<筆者注>

80年史→『大原社会問題研究所雑誌』494・495号、2000年1・2月合併号の「大原社会問題研究所80周年」の記事を指す。

法政大原の分類表は『法政大学大原社会問題研究所 図書・資料分類表』、主類表は以下の通りである。

0 総記 1 哲学、自然科学、宗教 2 歴史、地理 3 社会科学 4 労働 5 産業 6 工業  
7 文学、芸術 8 機関雑誌 9 雑誌、通信

<インタビュー>

森田：是枝さんがお作りになった分類表について。

是枝：統計は資料の方で作った。後は私が作りました。それぞれのところで作ると、その人の考えでいろいろな体系ができてしまう。東京でも秋岡梧郎さんが特殊な分類を作っているし、大橋図書館の竹内善作も特殊な分類を作った。それはそれで体系的でよいのだが、どこに自分の求める主題があるのか分からない。だからそういうのでNDCを大きく変えるのはどうかなという、ただNDCは一般的で大原の収書には合わないというのが大方の意見だね。それで折衷案みたいなことになっている。

森田：これは作り上げるまでに大変だったのでは。

是枝：でも割と早くできたみたいですね。基礎の分類はNDCでそれを変えるだけだからかもしれませんね。

森田：大原社研が大阪時代に作った分類表が現場にありましたか。

是枝：はじめは、これができるまではそれを踏襲していた。小判型のラベル、まだあったな。

森田：標題紙上に鉛筆で書かれた分類記号は。

是枝：我々は参考にするというよりも、独自にやっていたから。

森田：分類ができあがって、目録に分類を施していったということですか。

是枝：そうですね。麻布校舎は社会学部の前身、工業高校もあった法政の附属で、それが廃校になって、工学部ができて小金井に行って、麻布校舎が空いたので、それを借りられたのが良かった。場所的に大学院の書庫ではどうにもならなかった。そこに本を運んでこられるというので初めて分類して排架できる体制ができた。

Q-10: 1日に何冊位、分類できましたか。

是枝: 何冊というような記録をとっていなかったと思いますが、平均的には50冊から80冊くらいではなかったでしょうか。もちろん、これはあとで分類を始めたころのことですが。

Q-11: 目録カードはどのようなものを使用しましたか。7.5cm×12.5cm、あるいは別の仕様のカードですか。

是枝: 標準の7.5×12.5cmのカードです。

Q-12: 目録カードの種類は書名、著者、分類、件名ですか。

是枝: 第2次整理では、書名、著者名、件名、分類カードをすべて作りました。

<インタビュー>

森田: 目録カードはタイプ打ちですか。

是枝: タイプと手書きと両方です。この頃から複写できるようになった。謄写版で、図書館協会に「古野健雄」という人がいて、そのTF式、カード型の大きさの謄写版、それで刷っていた。そういう時代がありました。原紙をきって、複製して、それに標目を書きこんで、排列する。カードは1枚、1枚複製する。

森田: カードの複製は。

是枝: 当時は複製はしなかった。もう一人の係員が和文タイプで目録を作った。

森田: 目録カードの作成については、全責任を是枝さんがもたされたということですね。

是枝: 図書についてはそういうことになりますかね。

Q-13: 目録カードの「書誌事項」はどの程度詳細なものだったのですか。

是枝: その頃のNCRには記述の詳細度についての規定はなかったと思いますが、まあ、第2水準くらいのものでしょうか。それほど詳細に記述する余裕はなかったと思います。昔は今と違って目録の記述で第一水準とか第二、第三水準などといった水準の概念はなかった。一番簡単なのは叢書注記くらいなもので、注記事項はない。洋書などでいうと書誌注記くらいまで。洋書は基本記入方式であった。標目指示と分類を是枝が担当した。分類をし、他の人もやり始めた。当時は専任は増えない、雇えたのは臨時職員、学生。最盛期は7人。私が入ったときに6人。今は一人。あとは短期の期限付きの臨時職員です。

Q-14: 資料整理の流れを図にしていだけますか。

是枝: 第1次整理では図にするほどのことはなく、基本カードをつくっただけです。

第2次整理も工程というほどのこともないと思います。また、やり方も少しかわってきたと思います。和書の場合は私が、副出指示と分類をして、もう一人の図書係の女性がカードを書き、それをコピーして、標目を記入、配列するという段取りです。臨時職員を雇えるよう

になってからは2、3人くらい手伝ってもらったと思うのですが、あまりはっきり記憶していません。

Q-15：短命資料と言われる小冊子、パンフレット、ポスター類の整理は、どのような整理方法で整理したのですか、その決定者は誰ですか。

是枝：パンフレットも戦前のものは一般図書と同様に整理したと思います。戦後のものについても、図書にいられたものもあると思います。大部分は発行者別にボックスに入れて保管し、ごく一部はカードをとりました。しかし、かなり多くのパンフレットは未整理のままでした。

大原ではパンフレットは短命資料とは考えていませんでしたが、結果として、整理までは手がまわらなかったということです。パンフレットは運動体の重要な宣伝手段なので、運動史の図書館である大原にとっては保存すべき資料なのです。アナーキズム文献をあつめたエルツバッハ文庫などはパンフレットを製本したものが多いと思います。

<インタビュー>

森田：是枝さんはパンフレットやポスターを整理されたことはありましたか。

是枝：一次的なパンフレットはなかった。それは戦争で燃えてしまったのではないだろうか。残ったのは図書と一緒に整理した。パンフレットは戦前のものは表紙を付けているが、戦後のパンフレットは私のところは、整理していない。

Q-16：資料の切れ端、また資料として整理保管することはないと判断した資料はあったのか、もしそのような資料があったとしたら、その資料は廃棄されたのですか。

是枝：そういう資料はほとんどなかったと思います。

<インタビュー>

森田：大阪では、雑誌には大原社会問題研究所の印があるのを見ているが、法政大原で見た雑誌は印が押していない。

是枝：図書は蔵書印が押してあったが、雑誌はずっと押していない。

森田：大原社会問題研究所の印が受入印とばかり思っていた。

是枝：雑誌には印を押さないで、受入のカードに何月号がきたと日付を書く程度でね。雑誌はカード目録がなかった。事務用の目録ですね、受入簿のようなものしかなかった。逐次刊行物の目録はインターネットでも公開が遅れた。

Q-17：貴重な資料の保存、保管はどのような環境ですか。

是枝：書架に置く、保管庫に入れる、貴重書庫を作るなど50年代は貴重書は金庫に入れて保管されていました。貴重書庫ができたのは1986年大原が多摩校舎に移転したときです。

Q-18: 貴重書、貴重資料の定義はありましたか。

是枝: 定義があったかどうか知りません。洋書に関しては1960年「A Catalogue of selected publications and manuscripts in the Ohara Institute for Social Research」というタイトルで1880年以前に刊行された洋書の目録が発行されています。これはやはり、第1次整理のさきがけで、作成されたのは、後に一橋大学教授になった良知力氏です。この目録のなかにあるものが貴重書扱いになっていました。ほかに、プロレタリア文学関係の和書のなかに、貴重書のラベルをはったものがありましたから、戦前、貴重書の指定があったものと思います。

<インタビュー>

森田: 1880年以前が貴重書という理由は。

是枝: マルクスの没年(1883)あたり以前ということを知ったことがある。

## 2) 資料の公開

Q-1: 資料の公開、非公開の決定は誰がしたのですか。

是枝: 大原社研は戦前から閲覧室をもうけて公開していましたが、戦後は大学院のなかに閲覧室という余裕はありませんでした。書庫の隅に机が2台あってそこで閲覧してもらっていました。二村さんから『資料の公開問題については、『五十年史』の巻末年表、1967年の5月17日に「所蔵資料の整理公開に関する懇談会を開催」とあるのが、事実上、公開を決めた会合だったのではないかと思います。この会合に出たのは、所員全員だったように記憶しますが、どうでしょうか。』というメールをいただきました。私はこの会議については記憶がありませんが、通常、こうした決定は所員全員の会議で決定されていたので、このことについても同様であったと思います。

麻布校舎が借りられたのは1967年のことです。その結果、資料が展開できるようになり、閲覧が可能になったのではないかと思います。

<筆者注>

二村さん→二村一夫(1934-)

Q-2: 公開の原則は文章化されたものがありましたか。

是枝: なんらかのかたちで文章化されていると思いますが、当時の記録を調べてみないとわかりません。

Q-3: 複写ができる、できないの基準は。

Q-4: 貸出規定は。

是枝: 全部禁止なのか、あるいは展示等で資料する場合には特別に貸出がOKなのか上二つの問題についても、いつ、どんな規定ができたか、さだかではありませんので、研究所に資料を調



べてみます。複写はいまのようにゼロックスがどこにでもあるような時代ではなかったし、大原にも複写器はなく、大学院の事務所にある機械を使っていました。

### 3) 大阪との関係

Q-1：在職中に大阪府立夕陽丘図書館に資料の件で連絡したことはありますか。

是枝：特に記憶に残っていることはありません。

#### 追記

いちおう、ご質問に沿って書いてみましたが、かなり、記憶も薄れているので、あとで、訂正を要することがあるかと思えます。

69年から70年代までは、大原は受難の時代で、大学院が占拠されて、貴重書のはいついた金庫も壊されました。幸い、中にはいついた貴重書は無事でした。そんな状況で、資料を麻布校舎に疎開したり、お倉から運んだり引越し作業に明け暮れるような時代でした。そのために、整理作業に対する印象が希薄になっているのかもしれない。

もうひとつ、先のメールでおたずねしたのですが、つまり、あなたがなにを問題とされているかということです。たとえば、戦前の大原の図書がそのままの形では残らず分類替えをされてしまったということを疑問視されているのでしょうか。

戦前の大原の図書は1880年以前刊行の洋書以外はすべて戦後刊行の図書とともに新分類を与えられて一緒に配架されています。文庫として別置されているものは、所長であった高野岩三郎先生の蔵書、大山郁夫蔵書などがあります。向坂文庫は蔵書数からいってもきわだっています。以前は個人の蔵書を受け入れたときは、できるだけ、文庫として別置しようとしていました。しかし、スペースの関係その他の事情から、寄贈図書目録をつくり、複本は処分して、研究所にないものは分類して大原の図書と一緒に配架する方法をとるようになりました。

このように、時期によっていろいろかわっているので、お答えしにくいところもあります。今度大原へいったときに資料が残っているかどうか調べてみますので、お会いしたときにまた、お答えしたいと思います。

#### <筆者注>

高野岩三郎 (1871-1949)

追記で是枝は「たとえば、戦前の大原の図書がそのままの形では残らず分類替えをされてしまったということを疑問視されているのでしょうか。」と書いている。確かに当時の筆者は、大原社研資料、手紙や書類といったもの以外の本、雑誌を含めた全資料がアーカイブズでないかと考えていた。また今でもその考えを棄てていない。これについては別の機会に述べてみたい。

## 第6、7章のおわりに

1937年に資料が大阪と東京に分割された戦間期時代を経て、平和を回復した戦後から平成時代まで、共に大原社研の資料を所蔵する大阪府立図書館と法政大学大原社会問題研究所の2つの組織が、全く無縁のままであることを愕然としたのである。今後、次の世代に大原社研の資料を伝えていくために、2つの組織の間で資料保存、調査・研究についての検討や情報交換を期待するものである。また大原文庫の資料整理は、今回、天王寺分館の蔵書目録と大原文庫の蔵書目録を突合させてみて分かるとおりに複雑怪奇であり、依然として不分明さに満ちている。これを解明することが果たしてできるのかこれも大きな課題である。そして4年後は2019年、この年は大原社研創立100周年である。大阪府立図書館には大々的な記念事業を期待したい。

### 謝辞

本研究は2013年度個人特別研究費の成果の一部である。また二村一夫先生には常々筆者の煩雑な質問にご回答を頂くばかりでなく、法政大学大原社会問題研究所で資料整理を担当された是枝洋氏をご紹介頂いた。是枝洋氏には大原社研資料の整理について、筆者の唐突な質問の申し出に丁寧なご回答を頂いた。お二人にこの場を借りて深謝申し上げる。

### 注記

- 1) 法政大学大原社会問題研究所編. 大原社会問題研究所五十年史. 2001. p.193-194.
- 2) 庄谷怜子. 社会福祉学部の発足について. 図書館だより. 大阪府立大学附属図書館報. 大阪府立大学附属図書館, 1982, (12). [http://www.osakafu-u.ac.jp/library/collection/nagao/article\\_a.html](http://www.osakafu-u.ac.jp/library/collection/nagao/article_a.html), (参照2015-11-15).
- 3) 中寫真. 大原文庫の追加資料発見. 大原文庫研究の葉. 京都, 石井敬三, 1991. (4).
- 4) 加藤和基. 大原文庫紹介. 大阪府教育委員会月報. 大阪, 大阪府教育委員会, 1975, 7, p18-19.
- 5) 加藤和基. 大原社会問題研究所の足跡. 大阪府立図書館紀要. 大阪, 大阪府立図書館, 1968. (4).  
貴田春男. 大阪時代における大原社会問題研究所の創設と図書館活動. 私立大学図書館協会会報. 1985, 6, (84).
- 6) 一例として、“開館10周年記念「大原文庫」関係資料展—大原社会問題研究所と大阪府社会事業会館(厚生会館の時代)—” 展示期間 1984年10月22日(月)~11月10日(土).
- 7) 石井敬三は大阪府立中之島図書館、同じく夕陽丘図書館に勤務し、希望して大阪府立大学附属図書館に異動した。聡明で柔和、時にアイロニーを含んだ口吻があった。日本図書館文化史研究会発行の『ニューズレター』100号、2006年5月3日発行に「追悼石井敬三事務局長」が掲載されている。記事は「ニューズレターWeb版」で読むことができる。<http://jalih.jp/publish/newsletter/NL0100p.pdf>, (参照2015-11-15)。詳しくは、刊行予定の『(仮称) 図書館人物事典』(日本図書館文化史研究会編集)をご覧頂きたい。

- 8) 書誌事項は以下の2点を上げておく。(5) 石井敦先生古希記念論集刊行会編. 転換期における図書館の課題と歴史: 石井敦先生古希記念論集. 緑陰書房, 1995, (6) 日本図書館文化史研究会編. 図書館文化史研究. 日外アソシエーツ, 紀伊國屋書店(発売), 1996, (13).
- 9) 石井敬三編. 大原文庫研究の葉. 1~5. 京都. 1989-1991.
- 10) 石井敬三. 欧州図書収集物語: 大原社研・櫛田民蔵・久留間鮫造のことなど. 図書館だより. 大阪府立大学附属図書館報. 1992, (29).
- 11) 沿革・年譜. 東京大学大学院法学政治学研究科附属 近代日本法制史料センター(明治期新聞雑誌文庫、原資料部), <http://meiji.j.u-tokyo.ac.jp>, (参照2015-11-15).
- 12) 高松敏男. 藤澤桓夫蔵書始末. CABIN. 大阪, 中尾務, 2003, (5). p.75-81.
- 13) 若杉隆志. 個人文庫の冊子目録を検討する: 書誌研究. 大原社会問題研究所雑誌. 1990, (5), p.33-43.
- 14) 山根泰志. 忘れられた文庫たち: 中央図書館所蔵幕末明治期漢学者旧蔵書群. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2008-09, 2008, p.27-30. <http://ci.nii.ac.jp/naid/120001469069>, (参照2015-11-15).
- 15) 森田俊雄. 大原社会問題研究所文庫の研究(1). 大阪城南女子短期大学研究紀要. 2015, (49), p.29-50.
- 16) [大阪府立図書館]. 大阪府立図書館基本構想に関する報告書: 資料. 1970, 12, p.8.
- 17) 前掲書 注16. p.8-10.
- 18) 石井敬三. 創刊に当って. 大原文庫研究の葉. 1989, (1), p.1.
- 19) 前掲書 注15.

(もりた としお: 元准教授)

